

吉田康彦著 『北朝鮮を見る、聞く、歩く』

平凡社新書, 2009年

本屋に行くと、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮と表記）関連の書物がやたら目につくようになった。だが、その大部分は、核・ミサイル・拉致問題など、北朝鮮の政治・外交・軍事事情について論じたものである。北朝鮮の文化や市民生活について、まじめに書かれたものは皆無と言ってもよい。本書は、こうした状況に違和感を感じてきた著者が、日本ではほとんど知られていない北朝鮮の文化・芸術・教育・市民生活などを客観的に紹介する作業を通じて、日本人の読者に今まで余り知られていなかった「北朝鮮の素顔」を理解してもらおうという目的で書かれたものである。

本書は、一般向けに書かれたものであり、学術的専門書ではない。したがって、本書から得られる学術上の知見は少ないかもしれない。しかし、著者が人道支援の立場から「過去10回訪朝し、現地事情に精通している」（本書、233ページ）というだけあって、北朝鮮を研究する立場から見ても、教えられることがたくさんある。

周知のように北朝鮮は実質的な「鎖国」国家であり、厳しい情報統制を行っている関係上、研究者が他の国のように正確な情報を手に入れることも、詳しい調査やフィールドワークを行なうことも不可能である。では、北朝鮮を正確に理解するためには、どうすればいいのだろうか。

まず、本書でも紹介されている『労働新聞』、『朝鮮人民軍』、『青年前衛』などの政府系機関紙に掲載された社説や記事から、政府の方針や国内政治の大雑把な動向を理解することはできるだろう。訓練すれば、そうした政府系機関紙の行間から重

要な情報を読み取ることができるかもしれない。また脱北者にインタビューすることで、北朝鮮の貴重な情報を手に入れることもできる。しかし、最もリアルな情報を手に入れる方法は、本書のタイトルにも掲げられているように、実際に「北朝鮮を見る、聞く、歩く」ことではないかと、筆者は私たちに語りかける。

実際、北朝鮮の文化や市民生活の実態についての正確な情報源に限られている中で、本書で示される数多くの現場観察は貴重な資料でもある。確かに北朝鮮政府招待という「正面玄関からの訪問」（本書、233ページ）には、当局の監視の目もあり、多くの制約もある。そうした制約の中で、現地の人間とどのように信頼関係を作っているかが勝負どころであると、筆者は指摘しているが、筆者も同感である。

2006年以来、北朝鮮の核・ミサイル・拉致問題への対応として、日本政府は経済制裁を実施、日本国民に北への渡航自粛を呼び掛けているが、筆者はそういう時期だからこそ、日本人はもっと北朝鮮を訪問し、「素顔の北朝鮮」に触れる必要があると主張する。北朝鮮に一度も行ったことがない人にとって、特に終章（第9章）の北朝鮮旅行マニュアルは、具体的に参考になる。

本書を読んで、北朝鮮の核・ミサイル・拉致問題と、北朝鮮で暮らす普通の人々とを峻別して考えることができる日本人が増えていくことを期待したい。

（朴 一 大阪市立大学）